

畸形

隠し続けることの難しさ

もっと深く、隠れなければならない

もっと小さく、体を縮めていなければならない

恥さらし・・・、と

呟きながら、僕はなおも生きている

交差する眼差しの中に

僕と同じ思いを感じ取っても

それでもなお、手を取り合うことはあり得ない

毎日の笑いの中でさえ怖れている

いつ秘密を剥ぎ取られてしまうかもしれぬ、と

衆愚とは、畸形者の集団のことである、と

嘲り笑う者が、多数に向けて高らかに叫ぶ

ホロコーストへと囲い込む準備を整えて

おずおずと蒼穹を見上げる時

雹のように降り注ぐ嘲笑の陽光

暴かれてしまうという魅惑と怖れ——

それは、あたかも鋭い刃の上を辿るかのようであり

絶望を許さぬ鼓動の命令そのものでもある

「隠者としてのみ生き続けるがいい

お前のような者にはそれが相応しい」

嘲笑より恐ろしい憐憫、そして微笑と共に投げられる侮蔑

滴るように規則的な、途切れ途切れの時間
それらに僕は追い詰められてゆく
ぱたり、と壁ちるまで

(2010.3.26)